

神戸大学 大学教育推進機構 大学教育研究

第 18 号 (2009 年度) 2009 年 9 月 30 日発行 : 1 - 27

「保育総合演習」における子育て支援ファシリテーター  
養成を考える  
- 子育てコミュニティベースの取組みをもとに -

藤本 明美

# 「保育総合演習」における子育て支援ファシリテーター養成を考える ～子育てコミュニティベースの取組みをもとに～

藤本 明美（京都女子大学 / 非常勤講師）

## 1. 序

### 問題

高等教育機関の保育者養成課程において子育てグループをファシリテートできる力を身につけさせるにはどのような教育プログラムが適切かつ効果的だろうか。「京都子育てネットワーク」<sup>1)</sup>が「つながり作りプロジェクト」の名の下で進めている実践研究をもとにこれについて考察し、大学の「保育総合演習」等でそれを実現する授業モデルを提案する。

「つながり作りプロジェクト」の説明に入る前に、背景を概説し先行研究をレビューする。

### 子育てサークル活動と子育て支援政策の変化

1980年代後半から子育ての当事者である母親たちが子どもを遊ばせる場所と仲間、自らの友達と出会える機会、子育て情報を求めて、全国各地で「子育てサークル」「子育てネットワーク」「子育てミニコミ誌」等の活動を運営し始めた。

子育てサークル全盛期と言われる1990年代には子育てサークルが急増した。例えば、関西で新たに発足した子育てサークル数をみると、1989年～1990年に28であったものが毎年増え続け、1999年～2000年には128となっている（こころの子育てインターネット関西 2001）。当時「こころの子育てインターネット関西」の事務局長であった精神科医の原田正文氏は当事者である母親が運営するグループ子育てに希望の光を感じ、1990年後半から2000年初頭にかけて行政にその必要性を伝えつつ全国に発信を続けた（原田 2002）。

筆者は自らの子育てを通して必要性を感じ、京都市内において1994年に「子育てサークル」、1997年に「子育てネットワーク」を立ち上げた。その後、全国至る所で同じことを考え行動している人たちがいることを知り、子育ての孤立化や不安から親子を救うには地域における仲間作りが不可欠であると確信するようになった。

国の施策における子育て支援の位置づけも、こうした社会の動きとともに変化した。子育て支援は1994年の「エンゼルプラン」で少子化対策としてうたわれていたが、2003年の次世代育成支援対策推進法において次世代育成のための取組みのひとつとなった。同時に、当事者が資金をやりくりしながら空き店舗などを拠点として始めた「つどいの広場」は、2003年より政府が数値目標を掲げるようになり、各自治体が運営委託資金を提供するようになった。

京都市も、こうした国の政策の下で、2005年度から2009年度の次世代行動計画である新「京・いきいきプラン」において「つどいの広場」という名の拠点作りの目標数値を20カ所と定めた。小学校区を基礎単位に保育所や児童館が170カ所、「地域子育て支援ステーション」に指定された。「屋根のある公園」としても親しまれている児童館は、既存のもの合わせて111カ所が整備された。その他、幼稚園・保育園の園庭開放や子育て相談、地域住民やNPO団体が運営する子育てサロンなど、様々な居場所が急ピッチで整備された。これらの取組みの結果、親子が集える場である子育てグループは行政・民間を合わせて300カ所を超え、京都子育てネットワークに登録している民間の自主グループも160を数えるまでになった。

こうした行政の取組みにもかかわらず、親子の孤立が原因で引き起こる虐待や母親の子育て不安は一向に低下していない。<sup>2)</sup>それどころか、行政が子育てサークル活動にとって望ましくない状況をもたらしているように思われる。また、1980年代より活発化してきた当事者運営の子育てサークルの力が2000年頃から全国的に一気に弱まったように感じられる。子育てサークル活動の衰退を生んだ要因の一つに行政支援が親をサービスの受け手にしてしまったことがあげられるだろう。行政主導の子育て支援への依存により親が社会人としての自主性や親の力を弱め、さらには、当事者運営の子育てサークルへのニーズとそれをつくろうとする意欲をなくしてしまったのではないかと考える。

これは決して楽観できる状況ではない。最近では国も地方自治体も予算削減を迫られ、様々な事業を縮小したり打ち切ったりしており、子育て支援も「聖域」でなくなった。もっとも、当事者の自助努力なしにはいかなる問題も解決しない。繰り返すが、子育ての孤立化や不安から親子を救うには地域における仲間作りが不可欠であり、当事者運営の子育てサークルづくりがますます重要になっている。

#### 保育士の役割の変化と保育者養成プログラム

子育て支援に係る行政だけでなく保育士の役割も変化した。1997年の児童福祉法改正で、保育所保育士に保育相談の努力義務が課せられた。2001年には児童福祉法第18条の4に「保育士とは、専門的知識及び技術をもつて、児童の保育及び児童の保護者に対

する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう」と明記された。

また、保育所に入所していない地域の子育て家庭に対する支援も保育所の任務と定められ、保育所は子育て支援の拠点としての役割を期待されるようになった。さらに、保育士の職場が一時保育、病院、子育て支援センター、児童館などに広がっており、保育士がボランティアをリクルートしたり、関係者をコーディネートしたりする機会も増えている。

このような流れを受けて、2002年の保育士養成課程改正により「家族援助論」、「社会福祉援助技術」が必修となった。確かに保育者養成機関において保育相談や子育て支援政策を学ぶ授業が開講されているが、手薄感は否めない。先に述べたように、当事者運営の子育てサークルづくりがますます重要となっており、子育て支援専門家としての保育士はその活動の中心となることを求められている。こうした社会的要請に応えるために、保育士をめざす学生は、保育者養成機関を卒業するまでに子育てグループをファシリテートできる力を身につけなければならないし、保育者養成機関はそれを保証する適切で効果的な教育プログラムを提供できるようにならなければならない。これは現在の日本の高等教育機関における喫緊の課題のひとつと言えるだろう。

### 子育て支援研究の現状

子育て支援に関する行政の本格的な取り組みや当事者運営の子育てサークルづくりの進展に追随して、子育て支援に関する研究も増えてきている。2009年5月に開催された日本保育学会大会を例に、最近の子育て支援に関する研究の状況を概観してみよう。大会では、育児相談、保育所における保護者支援、病児保育、一時保育、父親支援など、子育て支援を扱うセッションが多くみられた。学内の広場や地域の子育て支援拠点、子育てサークルやグループなど、孤立した子育てを予防する活動に関する研究が約40件あった。

しかし、その多くが、家庭ではできない集団遊びの中で母親も子育てを楽しんでいる気持ちの変化が起きるための子育て支援活動のあり方を探ったものや、子育て力の質的向上を果たすために教員や学生がどう関わるかを考察したものなど、親が支援の受け手である客体としてとらえた研究であり、親を主体としてとらえたものは親自身の主体性や持てる力を生かして育ちあいの関係を作っていく実践を報告した1件だけであった。また、この2・3年に国内で発表された研究を調べてみたが、親を主体としてとらえた子育て支援研究は5件しかなかった。それらを要を表1にまとめる。

表1からわかるように、5件の研究は、親が主体・中心となる子育て（支援）活動の意義と方法、及び、そうした活動に携わる保育者の役割と能力を扱っており、調査や実

践に基づいて考察し、示唆深い内容を含んでいる。しかしながら、次節で紹介する「つながり作りプロジェクト」のように、グループ自主運営やファシリテーターの人材育成までを見通した実践研究ではなく、日本における類似の取組みの報告は管見した限り見当たらない。

## 2. 「つながり作りプロジェクト」

先に述べたように、京都市内において、乳幼児の親子の居場所は様々な子育て支援機関や市民の力によりここ数年増え続け、300ヶ所以上開催されている。しかし、虐待や子育て不安の減少に効果が表れないのが現状である。また、「子育て支援の場に出てきている人は大丈夫で、出てこない人が心配。そこを何とかしなければ」という話をよく耳にするが、本当にそれだけなのだろうか。

1997年から草の根的に「子育てサークル活動」をサポートしてきた「京都子育てネットワーク」は、年々、親子の居場所の質が変化し、仲間同士のつながりの関係性が希薄になってきていることを肌で感じていた。そして、子育て支援の場に出てきている人たちでさえも、お互いが育ち合い、子育てを支え合っていないのではないかという不安を抱いていた。

表1 親が主体となる子育て支援に関する最近の研究報告

カテゴリー	研究者 (掲載/年)	研究 スタイル	概要
参加型の地域子育て支援	大戸美也子 (児童関連サービス調査研究等事業報告書/2007)	調査ドキュメント作り	参加型子育て支援の実践を国内外より取り上げ、事例集を作成し、質の高い親参加型活動の条件を分析。また、保育者に求められている親とのかかわり力を養成するために、先駆的な養成プログラムを開発しているミズリー州立大学の実践例を紹介。  子育て中の親自身の生きる力をエンパワーするプログラム開発と、その活動を展開するための専門家の養成も合わせて研究。

親の主体性	相戸晴子 (児童関連サービス調査研究事業報告書 / 2007)	調査	子育て支援が親主体の活動までをサービスの対象として内包化してしまい、親主体の子育てから親を客体とした子育て支援への変化が通常化してきている。「子育て支援サービス」とは何なのかを明らかにしていくための研究。親たち自らが問題解決を図る力量を、子育て支援サービスの拡充と親の主体性の構図の中でとらえていくことを試みる。
参加型の地域子育て支援	柳瀬洋美 中村洋子 鈴木百合子 (東京家政学院大学紀要第48号 / 2008)	実践調査	大学において親子参加型の保育・子育て支援活動(幼児グループ活動)を実践展開。その「幼児活動グループ」で行われている親のグループ活動に焦点を当て研究。集団発展段階初期において、個の成長と集団全体の発展が互いに影響し合い、共に育ち合っていく様子(個と集団の相即的発展)と、個が集団に安定して受容されることで、様々な自発的な関係発展がみられた。そうした集団活動を促進するための指導者としての役割を分析・考察。
参加型の地域子育て支援	名須川知子 岸本美保子 小林みどり (学校教育学研究第20巻 / 2008)	実践調査	保護者自身が子育て力を高め、子育てに喜びや楽しみを見出し、幼児理解や自己理解も深めていくことができるようにするための実践研究。幼稚園における園庭開放において、保護者の自主的な保育参加を促し、スタッフとして保育に関わる仕組みを作る。保護者、地域、在園児、教師にとっての意味を考察。
自立・関係づくり	小泉雅子 富田富士也 (日本保育士学会 / 2009)	実践調査	自立、関係作りを目指した子育て支援の事例紹介。「フリーペーパー講座」の中で「伝えるコツ」を習得しながら「子育て情報誌」作成を通じて仲間づくりと社会進出へのきっかけづくりへとつなげる。情報を受け取る側から提供する側へと変わること意識が変わり、子育てに対して気が楽になるという声も紹介されている。

「京都子育てネットワーク」はそれらの疑問や不安を解消するために、子育てグループや居場所のあり方に参加型・循環型の仕組みを作っていくことにした。それができれば、地域で声をかけ合う市民力を培うことにつながり、子育て支援や虐待予防の大きな力になっていくことが期待されるからである。

## 実態調査

「京都子育てネットワーク」は2006年10月、質問紙調査を実施し、親子の居場所作りや子育てグループ活動が孤立予防になっているのか、地域の子育て力向上に寄与しているのかなどについての実態を調べた。

調査実施に当たっては京都市保健福祉局子育て支援部児童家庭課、及び「きょうとNPOセンター」の協力を得た。回収数は2769件であった。

調査の結果、「参加することで話し合う仲間ができた」と答えた親は35%と少なく、京都市の取組みが親の孤立予防にあまり役立っていないことがわかった。一方、回答者の中でグループの運営に関わった経験を持つ親はわずか10%であるが、その60%が「より親しい仲間ができた」と実感しており、グループ運営への関わりが孤立予防に効果があることが示唆された。

また、グループ運営を経験したことがない親(87%)の中で、「(グループ運営を)やってみても良い」(20%)と「考えてみる」(55%)を合わせると75%になる。その理由を記述していただいた欄には、「もっと親しい仲間ができそう」「楽しそう」「自分の成長につながりそう」という理由が書かれていた。こうした結果は、自主運営の子育てグループづくりを進めているわれわれにとって希望の光となるものであった。

## ミッション

実態調査の結果、居場所作りの中で親同士がつながりをつなぎ、自主的に活動を楽しむことができるようにコーディネート・ファシリテートしていく必要があることが確認された。また、そういう力と経験を備えた人材を養成する必要があることもわかった。

子育て支援に関するニーズは他にもあるだろう。しかし、今このニーズに応える仕組みを積極的に作らないと、これからますますサービス提供型の子育て支援が拡がり、お客さんとしての居場所ばかりが増え続けていくことが容易に想像できる。「参加することで話し合える仲間ができた」と感じる参加者がせめて60%になるようにしたい。そうした子育てサークルづくりプログラム開発と人材養成プログラム開発のために、「つながり

作りプロジェクト」を立ち上げた。そのプロジェクトのミッションを時系列的にまとめると次のようになる。

京都子育てネットワークのメンバーは、これまで 15 箇所の子育てサークルを立ち上げ運営してきた。この経験を通して得たグループづくりのノウハウを持ち寄り、それを整理する。

プログラムを作り上げる。

グループづくりを実践し、観察する。

プログラムと支援者のかかわりを評価し、改善案を検討する。

グループづくりにかかわるハンドブックを作成する。

作成したハンドブックを元に支援者養成プログラムを作る。

支援者養成講座を行い実践の場を広めていく。

「子育てコミュニティベース～ここから～」

グループづくり・居場所づくりプログラム「子育てコミュニティベース～ここから～」はこの取組みの中で作り上げられた。そして、2007 年、このネーミングに思いを込めて、地域で安心して親子が出会える居場所づくりをスタートさせた。そして、2008 年にかけて「子育てコミュニティベース～ここから～」を地域の親たちと共に 5 ヶ所立ち上げることができた。小学校のサロン、地域の公民館、社会福祉協議会内のサロン、商店街の管理事務所など様々な場所を会場とした。もともと、乳幼児用に作られているものではないために、環境設定に配慮が必要となった。

今までの「子育てサークル」や「子育てサロン」などと異なるイメージを強調させたいという思いで、プロジェクトメンバーで考え出したのが「子育てコミュニティベース～ここから～」という名前である。コミュニティベースという言葉については、これまで社会学や心理学などで様々な概念で用いられているが、われわれは次のような意味で用いている。

- ・ 仲間同士がつながり、安心して子育てができる相互関係が育まれるところ
- ・ メンバーが、主体的に決めたルールや役割分担の中で、自主的に運営するところ
- ・ 誰もがメンバーとなることができる地域の子育て拠点  
「～ここから～」には次の思いが込められている。
- ・ 「～ここから～」で出会った親子がつながり合い、仲間となり、グループへと発展していったほしい。



- ・ プログラム終了後、「～ここから～」を第一歩としてスタートさせたグループに、例えば「コミュニティベース～ひろがり～」といったように、メンバーたちが考えて新たなグループ名を付けてほしい。

「コミュニティベース～ひろがり～」は居場所づくりのプログラムであると同時に、実践をつなぐファシリテーターを養成するプログラムとなることを想定している。

ファシリテーターは教師やリーダーのような存在ではなく、参加者と対等であり、一緒に活動を楽しみながら進めていく存在である。同時に、グループ内で参加者とは異なる役割を担う。参加者が何を感じ望んでいるかを引き出し、参加者同士がそれを共有できるよう結び付ける。そして、メンバー一人一人の良さやチカラをお互いが理解し合い、そのチカラをグループのために使うことに充実感を感じ合い、さらにグループとしてのチカラが高まっていくようサポートする。こうしたことができるようになるには、実践経験がものを言う。できる限り様々なファシリテーターと活動を共にしながら補い合い、学び合い、常に良い実践を求めて努力することが大切である。

「コミュニティベース～ひろがり～」における「ファシリテーター」には、こうした一般的な概念だけでなく、次のような思いもこめられている。サービスを提供する支援者ではなく、仲間とともに楽しいことを実現していく力、困ったことがあればともに話し合っ解決していく力、一人ぼっこの親子を作らず声をかけ合う力、これらの力を一人でも多くの親が身に付けるためのかかわりができる人材として力を発揮するそのようなかかわりを続けることによって、親が育ちあい、地域に広がる草の根的な子育て支援につながっていく。必ずその親たちは地域の活動に関心を持ち続け、街を歩いていても親子に声をかけ合うことであろう。そんな力が、安心して子育てできる地域へと育つ原動力になる。また、その親自身もたくさんの仲間と出会うことで、自分の子育てや人生に希望を持って楽しむことができるようになる。

### 3. 「子育てコミュニティベース～ここから～」の現場観察

#### 目的

親も子どもも他の親子とかかわり、協力し、一体感のある楽しい活動を通して、社会性を身に付け成長していく。しかし、成長するのは個々の親子だけではない。同時に、グループも成長し続ける。そして、1～2年経過すれば、メンバーである親子の状況（入園・出産・仕事復帰・引っ越しなど）や気持ちの変化と共に、停滞・衰退・崩壊といっ

たネガティブな結果を生む可能性もはらむ。それゆえ、ファシリテーターは、そうしたグループ発達の過程を知り、各時点でどのようにかかわればよいかわかるようにならなければならない。

「子育てコミュニティベース～ここから～」の改善を図るとともに、グループ発達の過程を調べるために、参加者とファシリテーターの行動を観察した。一般的なグループ発達の過程がわかれば、普遍的、かつ融通の利くプログラムをつくることも可能となる。

## 方法

### (1) 観察対象

このプログラムに参加した母親7人と、3カ月から2歳1カ月までの子ども7人(男児2人、女児5人;平均月齢9.7ヵ月、標準偏差7.3)、すなわち7組の親子、及び、ファシリテーター役の女性1人を観察した。母親は自分の子ども(すべて1人)と一緒に参加した。第6回はファシリテーター役のスタッフの都合が悪かったので、臨時に別なスタッフ(筆者)がファシリテーター役を務めた。また、第7回はスタッフの1人が受講者として参加した。第1回から第8回までの各回に参加した親子は、それぞれ、3組、4組、5組、6組、6組、5組、4組、6組であった。参加回数については8回、7回、6回が各1組、5回が3組、3回が1組であった。

### (2) 期間

プログラムは2007年7月6日から8月31日まで8回開催された。

### (3) 場所

「子育てコミュニティベース～ここから～」を実施した5箇所の1つ、京都市北区の公共施設の一室でなされた活動をその場で観察した。

### (4) 観察者(記録者)

毎回、同じ1人の女子大学生が観察者(記録者)となった。

### (5) プログラム

実施した8回のプログラムの概要を表2に、各回のおおよその流れを表3に示す。

### (6) 観察・記録手続き

観察者は、プログラム中はできるだけ参加者の邪魔にならない場所に立ち、参加者(親)と子ども、及び、ファシリテーターの言葉をできる限り観察シートに時系列的に書き留めた。また、親子の気持ちや行動についても変化があれば書き留めるようにした。

表2 実施プログラム概要

回	活動内容	具体例
第1回 ～ 第3回	・お互いを知り、安心できる場とするための確認	・名前を覚えるゲーム ・自己開示しやすい話題や、ルール作り 等
第4回 ～ 第6回	みんなで計画を立て、協力しながら楽しめる活動	・クッキング ・手遊び集作成 ・地域のマップ作り 等
第7回 ～ 第8回	終盤に向けてこれからのことを話し合う	・グループ運営に必要なことを考える 等

表3 毎回のおおよその流れ（モデル）

時間	活 動 内 容
9：30	会場準備
10：00	受け入れ
10：15 (導入)	おはよう（自己紹介ゲーム）
	アイスブレイク（親同士が仲良くなるあそび）
	子どもと一緒に楽しむあそび
(主部)	その日のメインとなる活動
	絵本
(結び)	次回の相談・予告
	さようなら
11：30	お茶タイム・情報交換
12：00	片付け

注) 第1回目は導入が、第8回目は結びが主部活動になる。

毎回のプログラム終了後に参加者から感想を聞きだすことができた場合にはそれも観察シートにメモした。さらに、観察者以外のスタッフ（ファシリテータ役、及び、筆者）がプログラム終了後に観察シートに目を通し、必要に応じて記録を追加・修正した。追加・修正された記録（観察シート）の例を補遺1に示す。

#### （7） 分析方法

8回のプログラム終了後、分析者（筆者）が観察シートに記述された言葉と行動を、次の5つの観点から分類してコーディングし、それを集計・分析した。

##### かかわり合いの満足度

- ・ 親同士が活動を通してつながることに楽しさを感じている発言や表情（非言語）
- ・ 子どものポジティブな反応やネガティブな反応

##### メンバー同士の関係性

- ・ 見知らぬ参加者同士が、お互いを知り合おうとする発言や自己開示していく発言回数が、親しくなるにつれてどのように変化していくか
- ・ 信頼関係を感じることばをかけ合う頻度
- ・ 遊びやことばをかけ合う様子から子ども同士の関係性をみる

##### 子育てへのコミット（関与）

- ・ 親の新たな自己への気づきや子ども（子育て）とのかかわりの変化に関する発言や行動
- ・ 他人の子どもとのかかわり合い

##### グループづくり

- ・ 消極的参加（グループへの関心・理解を示す）から積極的参加（グループへのメンバーとしての自覚）への移り変わり
- ・ リーダーシップ的な存在の出現や発言・行動

##### ファシリテーターの役割

- ・ プログラムの運営（雰囲気づくり・全体に話す）や参加者（個人へ・グループ全体へ）のかかわり合いが回を重ねるごとにどのように変わっていくか
- ・ 参加者の良さを引き出すなどのエンパワーメントの回数の変化

#### 結果

ファシリテーターの行動について各回の分析結果をグラフにして図1に示す。8回のプログラムにおける参加者の行動変化について、典型的なパターンを示していると思われる結果の一部（かかわり合いの満足度）を図2に示す。

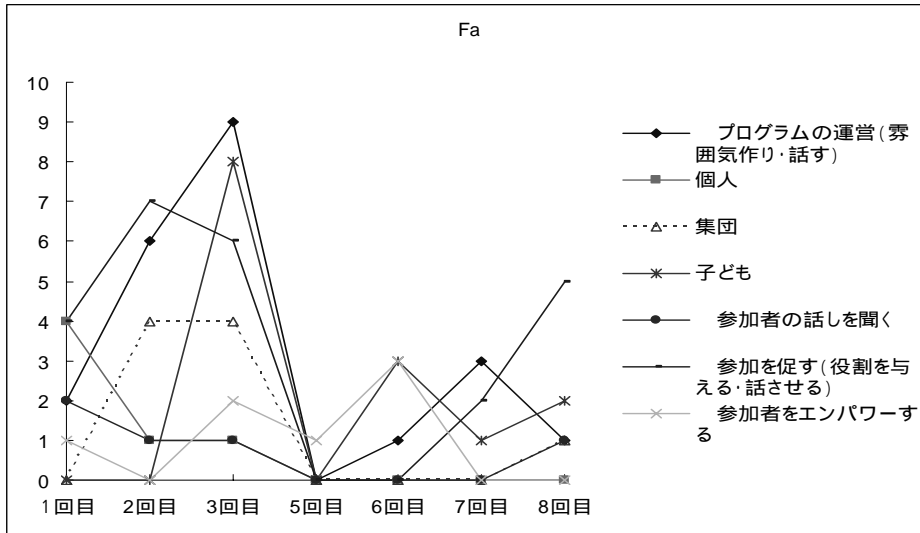


図1 ファシリテーターの行動変化

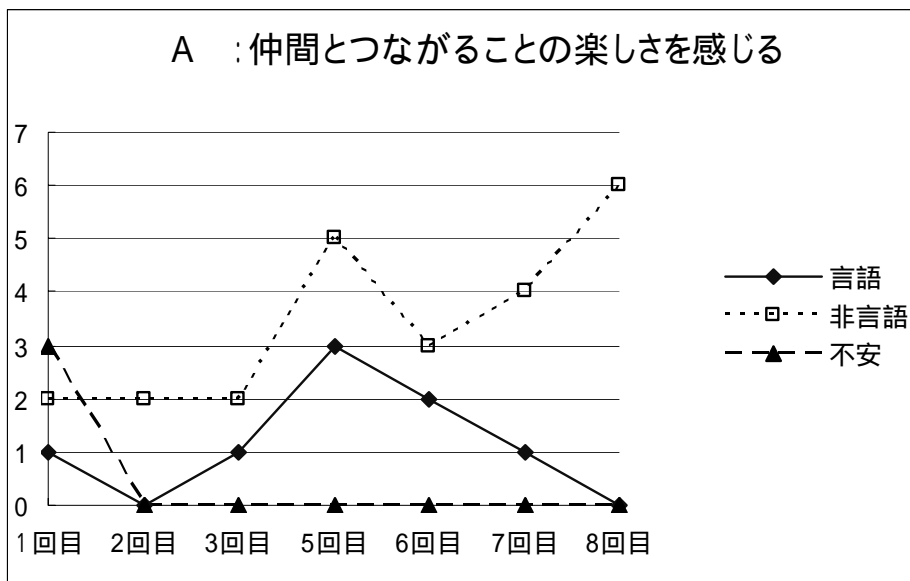


図2 参加者の行動変化(典型例A)

図2のようなグラフを参加者ごと、観点ごとに描いて比較した結果、表4に示すように、グループの発達過程が大きく3つのフェーズに区分できることがわかった。

表4 ファシリテーターと参加者の変化

回	ファシリテーターの心得	参加者の変化	参加者のグループへの意識
第1回 ～ 第3回	積極的にプログラムを進め個別対応も大切にす る。	簡単な自己開示が さかんに交わされ る。	参加を促されれば楽し んで反応する。消極的参 加。
第4回 ～ 第6回	参加者の意見中心に進め る。	活発に会話を楽し む。	積極的に意見を出しあ う。
第7回 ～ 第8回	グループを意識した参加 の促し。	つながりの大切さ を感じる。	リーダーの出現。役割分 担できる。

#### 考察

京都市北区で実施されたプログラムが参加者に受け入れられ、充実したものとなったことは毎回の観察結果から確認された。ファシリテーターの働きかけの変化と共に、参加者の仲間意識が深まり、グループへの意識変化も顕著に見られた。

最終回である第8回では、参加者が互いの子どもの成長のことを話し合ったり、他の参加者の子どもに微笑みかけたりするなど和やかな雰囲気の中に、今後の活動について参加者どうしで意見を出し合った。参加者から「こんな仲間のつながりが地域に必要なと感じた」という発言があり、地域の子育て力向上に寄与していく可能性にも話が及んだ。

また、第8回で参加者にプログラム全体を評価するための質問紙調査に回答していただいたが、その結果からもファシリテーターの働きかけやプログラムの趣旨が参加者におおむね受け入れられたこと、評価されたことが確認された。

さらに、グループの発達過程について、表4に示すように、大きく3つのフェーズがあること、そして、それぞれのフェーズでファシリテーターがどこに力点を置いて自分の役割を果たすべきかについて、ある程度わかってきた。

## 4. 討議

### 集団発達モデルについて

ストーン（1987）は「ボランティアのグループ指導入門」の中で、ボランティア・グループの発達段階を初期段階、中期段階、終了段階の3つに分けて説明している。彼によれば、初期段階は「グループ形成の段階であって、メンバーが互いに見知り始め、他のメンバーともまたボランティアとも親密になり始め、このグループが何であるのか、何をしようとしているのか、ということについての考えや感情を寄せ集める時期である」（51頁）。中期段階は焦点が「目的を達成するために果たさなければならない作業や課題に置かれ」ており、「この時期にボランティアが手近な作業を通して、共通の興味・関心や問題点や願望や希望をメンバーが見つけ出すように指導していくにつれ、他と区別できるようなそのグループ独自の特徴が現れ始める」（58頁～59頁）。終了段階は「共同体験は仕上げに向かい、全員が別々に離れ、新しい経験へと移行する準備をしなければならない時期」であり、「それまでに成し遂げてきたことを評価し、経験してきたことを再考し、グループ経験が自分たちにとって何を意味するものであったかを評価する機会でもある」（62頁）。

ストーンが想定しているグループはボランティアがリーダーとなる集団活動のグループであり、メンバーは一定期間集団活動に参加した後、解散し、メンバーは「別離」する。これに対して、「子育てコミュニティベース～ここから～」のプログラムは、8回のプログラムを終えた後、参加者が自主的、主体的にそのグループでの活動を継続・発展させることを想定しており、ファシリテーターはそのために様々な介入を行う。こういったプログラムの目的の違いはあるが、われわれの観察結果から描いたグループ発達の一般的な過程はストーンのものと同様点が多い。

ブランチャードら（1992）は、会社や工場などで生産活動をするグループの発達について、4つの段階に分けてとらえている。彼らによれば、第1段階では「目標達成への方向づけ」がなされ、第2段階では「不平不満」が噴出し、第3段階ではその不平不満が解消され、その結果、第4段階では生産性があがるという。しかし、そうなるためにはリーダーがグループの発達（成長）段階を見極め、状況対応的に自らのリーダーシップ・スタイルを正しく変化させていかなければならない。「オリエンテーションの段階」「不平不満の段階」「問題解決の段階」「生産の段階」と名付けられた4つの段階のそれぞれに対して、「指示型」「コーチ型」「援助型」「委任型」と名付けられたリーダーシップ・スタイルでのぞむべきとする。

「子育てコミュニティベース～ここから～」のプログラムは、生産や生産性向上を目

的としているものではなく、ファシリテーターの役割とリーダーの役割は異なる。しかし、ファシリテーターも、ブランチャードらが主張するように、グループの発達段階を見極め、それに正しく対応するように自らの行動を変化させる必要があると考える。今回の現場観察によって得られたグループ発達のイメージは、今後同様のグループづくりに携わる多くのファシリテーターにとって、自らが担当するグループの発達段階を知る上で役立つだろう。

米谷・鎌田(2000)は、グループカウンセリングでよく使われる集団発達の理論(Cory 1985)を基に、人間関係論的な集団発達のモデルを提唱している。グループカウンセリングにおいては集団の目標は単に「共同」ではなくメンバーの「相互啓発・相互成長」にある。しかし、集団発達は「集団づくり」「共同」「相互啓発・相互成長」の3つの段階を順にくぐっていくわけではない。「相互啓発・相互成長」が実りあるものとなるかどうかは「集団づくり」「共同」のフェーズで生じるさまざまな「集団の危機」において、メンバーがどれだけ真剣にそれと向き合い対処しようとするかで決まってくると考えている。

「子育てコミュニティベース～ここから～」のプログラムは子育て支援を目的としているが、企業の営利活動ではなくボランティアによる社会活動である。その意味で、社会教育、成人教育、生涯学習としての性格をもつ。従って、グループカウンセリングと同様、参加者自身の人間的あるいは社会的な成長・発達を目標のひとつとして持っている。従って、米谷・鎌田の提唱する集団発達モデルも参考になる。とくに、プログラムが終了に近づき、ファシリテーターに働きかけられながら今後の活動に向けて話し合う場面で、メンバーの戸惑いや反発、グループ発達の停滞や後退といった「集団の危機」を示す状況が生じることが、今回の現場観察からも確認された。こうした場面におけるファシリテーターの対処を考える際に、彼らのモデルは役に立つだろう。

本研究で行った現場観察の結果、「子育てコミュニティベース～ここから～」の8回のプログラムにおけるグループ発達は表3に示すように3つの時期に分けられることが示唆された。先に述べた集団発達の理論を参考にしながら、それぞれのフェーズにおけるグループの特徴、及び、ファシリテーターのかかわり方について説明すると次のようになる。

前期(第1回～第3回)は、いわゆる「グループづくり」の段階である。メンバーは互いに知らない者どうしであり、グループの目的やプログラム内容についても、あまりはっきりしたことはわかっていない。こうした状況では、ファシリテーターは一般的なリーダーの役割を発揮することが求められる。この時期は、とくに参加者への個別的な援助を綿密に丁寧に行なう必要がある。そのため、最初の1・2



回はメンバーへの指示が多くなるが、あまり指示を必要としなくなったメンバーに対しては指示を減らしていくことにより、徐々にファシリテーターの指示の回数が減っていく。グループとしてのまとまりはまだ不十分であり、チームワークもない。中期（第4回～第6回）は、いわゆる「共同」の時期である。メンバーがグループに馴れてきて、いろいろな作業がスムーズにできるようになっていく。中期はグループの凝集性がぐんと高まり、チームワークがみられるようになってくる。ファシリテーターはそうしたグループの変化にあわせて、指示を減らし、できるだけメンバーが自主的に課題をやっていくようにつとめる。一方、参加者個人への援助(配慮)は前期ほどでないにせよ、まだ高い水準を保たなければならない。中期の特徴は、中期の終わり頃、後期が近づくにつれて、ファシリテーターが働きかけをメンバー個人へのものからグループ全体へのものにシフトさせていくところにある。後期（第7回・第8回）は、いわゆる「終了期」と言えるが、グループの目的がそれ以後の自主活動にあるので、むしろ「旅立ち」あるいは「巣立ち」の時期と言った方がよいかもしれない。終わりが近づくこの時期には、ファシリテーターは、グループ全体がプログラムの趣旨を確認し、それを受け入れて自主的なグループ活動を立ち上げるように働きかけ(ファシリテーション)をする。メンバーの中にはそうした介入に反発したり、戸惑いをみせたり、急に参加態度が消極的になったりするかもしれない。こうした状況になっても、ファシリテーターはそうした問題をグループが自主的に解決できるよう見守り、個人的な介入は最小限にとどめておかなければならない。グループ全体、あるいはメンバーどうしで話し合い、互いの思い、願い、希望、不安、不満などを打ち明けあい、理解しあうことにより、そうした危機的状況を乗り越えることができる。危機を克服することでグループが一段とまとまり、グループのチカラが強くなる。そして、ファシリテーターの役割もほとんどなくなる。

#### 「保育総合演習」の授業モデル

「つながり作りプロジェクト」の一環として実施した質問紙調査と「子育てコミュニティベース～ここから～」プログラムについての現場観察の結果をもとに、大学・短大などの保育者養成機関において、「子育てコミュニティベース～ここから～」のファシリテーターとなれるような人材をつくるための方法について考えてみることにする。

親が主体となった子育てグループづくりのファシリテーターを養成するには、知識や技術の習得だけでは不十分である。むろん、初心者である学生が集団力学に関する基礎知識と主要概念を学び、それを使えるようになることは必要であるし、基本的な対人コ

コミュニケーション技術やグループワーク技法に習熟することは、チームで働くために不可欠である。しかし、そのための講義や演習は汎用性が高いので、ファシリテーターのために特化した教育プログラムとして置くというよりもむしろ、保育者養成の専門基礎科目として置くべきであろう。

むしろ、ファシリテーターのために特化した教育プログラムは、「つながり作りプロジェクト」あるいはその一部である「子育てコミュニティベース～ここから～」のように現場で実際に展開されている実践的プログラムと強く結びついたものであるべきと考える。まず、そうした実践的プログラムの報告書や、それを紹介したパンフレットやホームページにあたってみることに、また、それらに携わっている実践家を招いて話を聞いたり、現場に行ってみ学したり説明をうけたりすることも考えてみたい。その後、ファシリテーター講習会のような演習中心の授業に集中的に参加させて、技術をある程度習得させ、適切な動機づけ・態度形成をした上で、現場実習をさせる。そこである程度経験を積んだ上で、各回の具体的なプログラムを計画させるとともに、チェックリストを作成させるグループワークをさせる。このような授業を半年、あるいは、1年間かけて行うことが望ましい。最終課題としてマニュアルづくりに挑戦させるとともに、現場で有能なファシリテーターとなるための自己研修を計画させてもよいだろう。

保育者養成機関におけるファシリテーター養成のための教育プログラムをつくりあげるときに心がけるべきことは、保育学生に学ばせる内容はすべて現場の実践活動をくぐらせ、その効果性と時宜性を検証しておくこと、そして、少なくとも1度は実際に学生にそれを学ばせた上で現場に立たせてうまくいくか確かめ、問題点をみつけて改善する作業をしておくことである。授業担当者自身も、みずから教材を学んで現場に出向いて、教材に書かれてある内容が本当に現場で役立つか、文字通りの行動をして大丈夫か実践を通して確かめ、同時に、現場の実態や関係者が置かれている状況をしっかり把握してからでなければ教壇に立ってはならないのではないかと考えている。

「京都子育てネットワーク」は、これまでの「つながり作りプロジェクト」で得た経験とデータをもとに、ファシリテーターのためのハンドブック（京都子育てネットワーク2009）を作成した（補遺2）。そのハンドブックは、本論文で報告した「子育てコミュニティベース～ここから～」の現場観察の結果が盛り込まれるとともに、現場観察によってわかってきたグループ発達の段階と各段階におけるファシリテーターの役割が説明されている。また、そのマニュアルをテキストとしてファシリテーター講習会もすでに開催されている。

筆者はこうした「京都子育てネットワーク」の「つながり作りプロジェクト」における実践研究を通して得た経験と知見を踏まえ、また、今述べた授業モデルを基に、大学

の「保育総合演習」の時間にファシリテーター養成のための教育プログラムを展開したいと考えている。

注

- 1) 1997年に設立された京都の任意団体。筆者が代表を務めている。循環型社会において親の子育て仲間、子どもの遊び仲間のつながりをつくっていくことを目的として様々な活動を展開している。「京都子育てネットワーク」の活動、及び、筆者が実践してきた子育て支援活動については、津止・藤本・斎藤（2003）を参照されたい。
- 2) 厚生労働省（2007）の統計を参照されたい。

## 文献

ブランチャード・カリュウ・カリュウ 川勝久・浅見広子 訳 1992 一分間マネージャーのチームワーク ダイヤモンド社 (Blanchard, K., Carew, D., & Carew, E. 1990 *The One-Minutes Manager: Build high Performing Teams*. Blanchard Training & Development Inc.)

Corey, G. 1985 *Theory and Practice of Group Counseling (2<sup>nd</sup> Edition)*. California: Cole Publishing Company

原田正文 2002 子育て支援とNPO 親を運転席に！支援職は助手席に！ 朱鷺書房  
こころの子育てインターねっと関西 2001 ひろがれ！子育てネットワーク～全国の子育てネットワーク調査結果と事例集 こころの子育てインターねっと関西

厚生労働省 2007 平成18年度 児童相談所における児童虐待相談対応件数等（平成18年度社会福祉行政業務報告（福祉行政報告例））（平成19年9月28日公表）

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv16/index.html>（2010年1月20日アクセス）

京都子育てネットワーク 2009 仲間づくりのためのファシリテーション実践ハンドブック 京都子育てネットワーク

米谷淳・鎌田美智子 2000 看護場面におけるコミュニケーションガイド 日総研出版  
ストーン 大利一雄ら 訳 1987 ボランティアグループ指導入門 勁草書房  
(Stones, J.M. 1983 *How to Work with Groups: Guidelines for Volunteers*. Charles C. Thomas Pub.)

津止正敏・藤本明美・斎藤真緒 2003 京都の子育てネットワーク 子育てサークル共同のチカラ 当事者性と地域福祉の観点から 文理閣

補遺 1 記録シートの例

1回目記録(7月6日)コミュニティベース～ここから～プログラム

参加者： ・ (0歳4ヶ月) ・ (1歳2ヶ月)  
 ・ (2歳1ヶ月) 欠席：4名

時間	スタッフ	親子の様子
10:00	参加者受付 おもちゃを用意 参加者と談話	さん：少し緊張している様子 他の子どもと目を合わせニコッと笑う ゆ：お母さんから少しでも離れると「ママー！！」と言って泣き出す
10:25	手遊び、ふれあい遊び ・くるくるとんとん 子どもの手でとんとん 頬 頭 お母さんの手でパチパチ  なまえなまえなまえ  子どものことで気をつけてほしいことを先に聞いておく  子どもを抱っこしておさんぽ遊び	頬に自分の手があたると、みんなニコッとする ゆ：楽しそうに一緒に歌を歌いながら手を動かす お母さんが子どもの目の前で手を叩くといもわも真似をしてパチパチ手を叩く わがいのほっぺを触ろうとする 塩見さん：少し心配そうな様子  スタッフの話を頷きながら聞く  1人ずつ住んでいるところや参加した理由などを話す です、よろしく～とお互い言った後、今度は相手の子どもの名前を言ってよろしく～と言う お母さんたち笑顔

<p>10:50</p> <p>輪になって座る</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・はんかち遊び</li> <li>　　じーじーばー</li> <li>　　こいこいこい</li> <li>・おすわりやす</li> </ul> <p>みんなで遊ぼう</p> <p>グループに分かれる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・血液型</li> <li>　　ひげじいさんの手遊び</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・パン、ご飯、その他</li> </ul>		<p>わ：ひに興味津々</p> <p>　　さん親子：ニコニコしながらたかいたかいをする</p> <p>わ：タオルに興味を持つ</p> <p>　　さん親子：向かい合って遊ぶ</p> <p>子どもと目を合わせて、お母さん笑顔</p> <p>始めは戸惑っているように見られたが、スタッフが「私 A 型～。」と言うと、それに続いてお母さんも手を挙げて型～と言いグループに分かれる</p> <p>ゆ：タオルが落ちるのを見て声を上げて笑う</p>
<p>11:00</p> <p>何パンですか</p> <p>　　～？などお母さん達の言葉から話を広げていく</p> <p>月齢順に並ぶ</p> <p>輪になってお話</p> <p>参加者から声が出ない時はスタッフが発言する</p>		<p>子どもはおもちゃで自由に遊ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・家で子どもと何をして遊んでいるか</li> <li>・おもちゃのキーボードの話</li> <li>・お絵かきについて</li> <li>・掃除について</li> <li>・名札について</li> </ul>
<p>11:20</p> <p>また、　　ちゃん</p> <p>は？というように声をかけながら進めていく</p>		<p>ゆ：少しずつお母さんの元を離れるようになる</p> <p>ゆ：アーと言いながら絵本を取りにいく</p> <p>子どもたち絵本をしっかりと見ている</p> <p>　　さん：子どもの顔をときどき見ながら</p> <p>　　さん：「プー。」と子どもに言葉がけ</p>

<p>11:30</p>	<p>絵本の読み聞かせ ・ぶーぶーぶー</p>	<p>をしながら さん：子どもに言葉をかけながら見る わ：他の子どもに触りたい お母さんがさっと出てわの手を取り注意する わ： さんに何かを渡す仕草をする</p>
<p>11:35</p>	<p>・わんわんなにしているの ・ぽぱーぺ、ぽぴぱっぷ</p>	<p>さん：もらう仕草をしてニコッと笑う 最後に大きいあんころもちを作る時、どのお母さんもさっきよりも大きく手を広げて作っていた</p>
<p>11:55</p>	<p>終わりの手遊び ・あんころもち 子ども お母さんが食べる大きさ みんなで大きいものを作る お茶タイム 塩見さんの話を聞き、アドバイスを また、朝爪を切ってきたという言葉聞いて、えらい、それでいいよなどと肯定し、お母さんの気持ちにも共感する 片付け</p>	<p>さん：子どもが他の子どもに手を出すのが心配だったようで、スタッフに相談  つわりの時に食べたものの話 ゆ：大人のそばに行って、あ～んと食べさせる仕草をして遊んでいる さんが さんに「あそこのマンションも子ども多いですね」と声をかけ、話をしている</p>

## 補遺 2 ファシリテーター向けハンドブック（一部）

### プログラム全般にかかわるファシリテーターの配慮

親子が安心できるかわりをしよう

- 様々な価値観・生き方があることを広く受け止めていけるよう複数のファシリテーターの力量でカバーしましょう。
  - ・不安・疑問に対することはかけを充分にする。
  - ex: 授乳やオムツ換えは随時しても良い など。
  - ・スタッフ同士の私語は慎み、参加者と積極的にかわりを持ちましょう。
- 参加している親たちは、豊富な経験とキャリアを持った一人の大人です。支援の受け手ではないことに留意して接しましょう。
- ファシリテーターの経験や価値観を押し付けないようにしましょう。
  - ・子どもの行動の裏にある思いを一緒に考えましょう。
    - ワーク：スタッフ間で価値観ゲーム（66頁参照）など、お互いの違いに気づくワークを通して、新たに自分の価値観を見つめ直してみよう。
- 子どもの行動を見守りましょう。
  - ・子どもの発達を理解し、活発すぎる行動や、活動に合わない行動をとった時、安全性に配慮しつつ、できる限り子どもの個々の気持ちを尊重しましょう。
  - ・親には子どもの気持ちを代弁し、必要以上に親が子どもの発達を心配したり、他者の目を気にしなくても大丈夫であることを伝えましょう。
- 親子の良いところを引き出していきましょう。
  - ・親が子育てをがんばっているところをことばにして伝えましょう。
  - ・子どもの良いところを伝えましょう。
- ファシリテーターの言動は、親に影響を与えることがあるので気をつけましょう。

3E

### 第三章

#### 子育てでコミュニケーションのグループ発達のプロセスとファシリテーターのかわり

### 1 初期段階（第1・2回目）ドキドキ期

#### ① グループの状態

初回はテラシを頼りに「遅れず遅くず行けるかな？」「しゃべる相手はいるかな？」「どんな親子が来るのかな？」「子どもがぐずったらどうしよう」「子どもが他の子のおもちゃをとったらどうしよう」「オムツ換えや授乳はどうしたらよいのかな」・・・とたくさんの不安を抱えての参加です。逆に、友だち数人と共に「さぁ進ぼう！」と言気込んで参加する人たちもあります。このようなバラバラな状態である段階はまだ「グループ」とは言えず、個人参加の状況です。

#### バラバラ個人参加からグループへと導くために必要なこと

- ◎参加者同士がコミュニケーションをとる。
- ◎参加者がお互いを知り、わかりあう。
- ◎参加者がグループの目的を共通理解する。
- ◎参加者一人一人がグループの一員として他のメンバーと協力して目標を達成させようとする自覚や意識を持つ。

#### ② 活動内容

- ・安心して自己開示ができるようにルールづくり（83頁参照）をしていきましょう。
- ・「ふれあいあそび」（69頁参照）を織り混ぜながら、「自己紹介ゲーム」（52頁参照）や「親同士が仲よくなるあそび」（60頁参照）などのアイスブレイクを主部の活動として位置づけると良いです。

#### ③ ファシリテーターのかわり

参加者同士が安心して出会い、知り合い、活動を楽しめるよう、ファシリテーターは次のようなことに気をつけましょう。

3E

# **On Developing the Facilitators for Child-Rearing Support in the subject “General Practice for Child-Rearing”: Based on the Program “Community-Base for Child-Rearing”**

Akemi Fujimoto (Kyoto Women’s University)

In 2007, “Kyoto Child-Rearing Network” (NPO) began an action and research project for developing child-rearing groups and volunteer staff who plays a role of facilitator in the group-making program “Community-Base for Child-Rearing”. In the action and research project, the eight-day group-making program in one of five places was observed. Seven mother and infant pairs participated in the program. The observer wrote talks and nonverbal behaviors of mothers, infants and the facilitator. In order to investigate into the developmental process of the child-rearing group, their talks and nonverbal behaviors were coded and counted in each aspect of group process. The results suggested that there are three phases in the developmental process of the child-rearing group where the facilitator is expected to play different roles one another. In 2009, KCRN published a handbook for staff of such group-making program and started to hold seminar for the child-rearing facilitators, using the handbook as the textbook. In the discussion, it is discussed that the grand design of University educational program “General Practice for Child-Rearing” should be made on the base of such an experience as the action and research project including survey, observation and practice of developing the child-rearing group as well as the group-making facilitators.